東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
学生新聞会
男子部
新宿区柏木4～600
TEL（362）3261
女子部
台東区上野桜木1-10-19
TEL（821）4004
発行人　八谷　正平

カワイ肝油ドロップ製造発売元
河合製薬株式会社
東京都中野区野方町二ノ一二七一
電話東京（385）三一一一番（代表）

執行部　基本方針発表

「人間不在の薬学教育に抗して」

男子部執行委員長　小野彰一

成田では幾たびかの警官隊と三派系学生との衝突があり、学生運動にたいする見方が云々されてきた。エンタープライズ以後、市民の意識は確かな変化として取らえられ、脱皮せんとするうずきが、彼ら佐世保市民に発芽したことも知られている。また反面、これら学生が世間と断絶も我々一般学生からみてうなずけることである。彼らの過激な行動に対しては政治的状況を抜きにしては考えられないが、一般の問題意識とはっきり隔絶を感じさせるところに、広い意味での教育問題があると思わざるを得ない。来たるべき七十年安保に対する我々の態度は、日本の将来の礎となるはずであり、この重大な一時期に我々が何をしたかということが問題になるのであるこの場合の選択はAしからずんばBという絶対的なものとして考えるにしても、我々はもっとゆとりを持って全体の状況を考えるべきである。軽々しい飛躍は慎まねばならぬ。

今年の東薬祭運営委員会は、統一テーマとして「東薬生の精神的自立」を掲げ、その具現化したものとしてサブテーマ「七十年安保を考える」を掲げている。我々執行部はここで運営委員会に強調して望むことは、単なる選択という軽薄さを打出す様なことはしてもらいたくないということだ。なぜならば、テーマ自体精神的自立をねらいとしているのであるからである。

さて本題に入ろう。近頃東大、京大をはじめ各地で騒がれている医師登録制から入ってみよう。ここではインターン制、登録制について詳細を付記するつもりはない。ここで我々薬学生が認識しなければならないことがある。それは青年医師や医学生の既成の旧体制の改革運動の転開の仕方、団結に対しての幾分の羨望はあってもその闘争には患者に対する概念が置き忘れ去られてしまっているのだ。煎じつめれば、旧体制とエゴとの泥試合に他ならないのではないか。これを踏まえて我々薬学生薬剤師も、もう一度医療にたずさわっていることを再認識してもらいたい。特に一年生は希望に胸ふくらませて入学してこられたが、実は薬学が医療の一分野であることが全く感じられず、激しく流動しつつある薬学を全体として有機的、関連的に執らえられていない教育に気付かれることだ。一部の教授たちは、単なる専門分野の知識の切り売りをするだけの教授屋商売と化しているのだ。人間を対象としない「人間不在の薬学」これが薬学の実体か。

マスプロ教育の基に「薬学が何ぞや」という問いの意識さえ持たずに卒業して、現実に対する甘さ故か、自殺を……。

その反面、我々学生の先生方に対する肩すかしはなかったろうか。先生方の期待に反したことはなかったか。各人がこの問いかけに忠実に答えようとすれば、確かに思い当る節があるだろう。真に東京薬科大学発展を願うのは、他ならぬ本校学生であり、本校教職員であり、普遍的には全国民である。社会に生産性のない学問は、自己満足の学問でしかなく、社会はこれを相手にしなくなる。薬学教育が即生産性、向上性を有し、明日の医療に貢献する為にも、また企業に乗り遅れた自殺者を減らすためにも、我々薬学を志ざしている若人は、なまはんかな気持ちを捨て去り、薬学が、そして東薬が、直面している問題に真剣に取り組んでいかなければならない。我々の身に迫ったこのブキミサまでも意識せざるを得ない問題が、我々を襲って飲みこもうとしているのだ。さあ我々が奮い立つのは今だ。今をおいて他になし。

昨年こんなことがあった。講義中の先生の声が小さくて内容がつまらんと率直に先生に申し出たところ、最初のうちは当惑の顔をみせておられた先生も一緒に相談をしておられるうちに、どうすれば皆んなが聞きとれ、意欲を持って聞けるか真剣に考えて下された。こんなことは取るに足らないほんのささいなことであるが、先生と学生が一体となってどうすればより向上するか討議見当したことに大きな意義が感じられた。この様な姿勢は、学内の問題、ひいては社会の問題を考えて行く時に最も基本的なものになる。

勉強会開催　実に我々悩み多き薬学生が問題すべき事がらについて薬学概論を中心に行いたい。現実に授けている教育と、激動する社会とのくいちがいを凝視して、そこからわれわれは何かを感じ認識し、これからわれわれは一体何をなすべきかを考えていくことが必要である。読書会、講演会、討論会、映画会、教授との話し合い、この様な中から君たちの生きる道人生観の方向づける見い出してくれることを切に望む。悩んでいるのは君ばかりではない。君の隣席にいる友をみよ。まさしく君と同じ程度の苦悩は持っている。薬学生よ、団結せよ。

規約改正委員会発足予定

規約立案施行されて二十数年を経て、現在運営上いろいろの歪みが生じている。執行部と女子部の執行部のあり方や、自治会費値上げ等々のことが表面化している。しかしこれらの問題はまだ研究の余地があり、慎重さを要するであろう。

対外的問題

東薬連及び政治的問題を自主的に把握していこう。これも単なる薬学生という狭い領域だけでなく、大きく市民として政治に参加することも忘れてはならない。

クラブ活動の推進

部屋の整備改善、クラブ活動への執行部としての参加を行っていきたい。

さて我々がこの一年間でどの程度できるか疑問にしても、これを支えるのは他ならぬ君ということを付記して再会。

現状不満の自治活動

多面的把握を

女子部執行委員長　西沢啓子

今日大学の自治及び学生の自治をめぐって様々な論議がたたかわされ、社会的にも注目を集めている中で、自治を行っていく私達はどのような立場から何に基づいて活動していくべきでしょうか。又、私たちをめぐる情勢はベトナム戦争を中心とする世界情勢から身近な私達の学園生活・自治権の問題物価値上げ問題に至るまで一本の結びつきの中で大きくしかも急速に変化しつつあります。この点で、無気力、無関心といわれる東薬生の中にも少しづつ変化が表われてきてる事は見逃してならない事だと思います。これら二つの点を考慮しつつ本年度女子部自治会方針を述べていきたいと思います

一、正しい医療観医療知識を身に付けていくための薬学教育をめざして

(1)薬学とは何かを追求

学校で学んでいる私達にとってなかなか現場の問題が反映されないという悩みがあります。そこで医学生・看学生と共に集団検診に参加したり、製薬会社・研究所の見学によって私達の学んだ知識を将来どのように生かしていくのか考えていきたいと思います。と同時に、学校で学んでいることについても必ずしも薬学として体系づけられたものではなくバラバラの知識の寄せ集めであることに私達は不満を感じています。そこで、これまでの数学や薬理・哲学の小ゼミの活動を更に発展させていくとともに、様々な講演会を通して薬学を考えていきたいと思います

また理科系大学であるためとかた偏りがちな私達に人文科学・社会科学の時間は貴重である筈ですが現状はなかなか私達の要求通りにはいきません。正しい医療観・世観を身に付けていくためにも、一般教養をもっと充実させ、様々な講演会や小ゼミを設けたいと思います。

(2)卒論の充実

将来実力ある薬剤師として社会で活動していく上で、日頃の実習は教職員の不足・設備の不足等により十分なものとはいえないことから多くの学生が卒論実習に期待しています。しかし現状は様々な問題をかかえ学生の立場に立った卒論は十分には行なわれていません。本年度自治会では卒論の在り方、目的等を卒論委員会を中心に教授助手の先生方と共に、四年生だけでなく全学生の中で問題を掘り下げていきたいと思います。

二、楽しく豊かな学園生活の為の環境づくりを

(1)利用しやすい食堂に

安くておいしい食事をしたいということは大多数の学友の切実な要求です。本年度は食堂委員会を設け生協運動の一環として食堂の従業員の人達とも手を結んで食堂問題を解決していきたいと思います

(2)クラブ・サークル活動の一層の発展の為に

大学生活の大きな位置を占めているサークル活動をさらに発展させていく上で様々な問題があると思います。例えば学生ホールの部屋を配置換えしてもっと使い易くするとか、冬でも使用できるように暖房を十分に整えるとか、十分な活動をする為に下校時間をもっと延長するとか、談話室をつくるとか要求がうずまいています。本年度自治会ではこれらの要求をどんどんくみ上げ学校交渉・団交をしていきたいと思います。

(3)勉学条件の改善

私達が学問を学んでいくに当ってより勉強しやすい環境を望むことは学生としてあたりまえのことですが、現状は不備な点が多く様々な不満がうずまいています。二百名授業、マイクが聞えない、出席制度、実習器具の個人負担etc多くの点から要求が出されています。本年度はこれらの要求を今すぐ実現できるものと充分調査、研究して実現していくものとに分類して学校交渉、団交をしていきたいと思います。

三、文化・スポーツ活動を旺盛にくり広げよう。

(1)文化活動

多くの人達と人生について、恋愛について、学問について、社会問題について話し合いたい又は、教授助手の先生方と話し合いたいという大多数の学友の要求に基いて講演会、映画会、合ハイ、コンパ、セミナーetcをできるかぎりたくさん企画していきたいと思います

(2)スポーツ活動

スキー学校、スケート学校等を計画していきます。

四、平和と民主主義を守り、考えていこう。

私達の大学生活は決して社会と切り離された所で存在するのではなく、社会的・政治的状況の中で存在し変化していくことを考えれば東薬生としても目をそむけることはできないと思います。又、平和と民主主義はすべての人間が望んでることでもあります。これらの点を考慮して本年度は、学友がどのような事に関心を持ってるかを調査した上で、私達に合った形でみんなで考えていきたいと思います。その為、資料展示や話し合いの場も設けていきたいと思います

五、自治会の民主的運営をめざし

第一に七割八割の学友が参加する自治会活動を作り上げていくため広範な学友が要求している問題をとり上げ大部分が支持できるような解決方法で活動していきたいと思います。その為、学友の要求が充分自治会に反映できるよう自治委員会を強化し、学年総会（クラス討論）での話し合いを充分つくしていきたいと思います。こうした立場から三派・革マルのマスコミ全学連とは別に多くの学友の要求に基づいた巾広い自治会活動をしている全国学生自治会総連合（全学連）の活動を参考にしていきたいと思います。

第二に、自治会規約の再認識の為に、解説パンフ等を通して学友すべてが自治会の意味を考えられるように進めていく予定です。最後に、男子部自治会及び先生方とも手を結んでみんなの自治会活動をすすめていきたいと思います。

新入生を迎えて

学長　寺阪正信

三百名に垂んとする新入生を迎えて、われわれは想を練り心を新たにして諸君のわが薬への道の門出を祝うものである。

薬学は薬に関する学問としては[illegible]原は誠に古いのが現代科学としては、殊にわが国では、創められてまだ百年にも達しない。この間幾多の変貌もあり、関聯科学と交錯して学ぶものにとって方途に苦しむほどであるが、かつて科学的要素が主で生物学的要素が従うとされたことも今では必ずしもそう簡単に言い切れない。医療の対象が生物であり、生物の諸現象とその機構が近時著しく闡明されつつあるからである。しかし薬品を取り扱うに当っては化学的にまず分析進んで合成という順序が一般であるから新しい薬の開発もまず分析的な仕事から手を着けなければならない。この意味で「大学」の「物に本末あり、事には終始あり」の訓えは今日でも生きている。根本を養はずして亭々たる樹には育たず、先後を知って始めて学問の道も達成される。薬学の課目の多さ、われわれも驚くばかりであるが、薬剤師の職能の幅の広さを思えば仕方ないともいえる。その深きを求めんには大学院を含めて学部卒業の後専門を選んでその道の練達の士たることを努めよ、といい度い。余り先を急ぐこと勿れ。

本年は恰も明治百年に当る。偶、恩師朝比奈泰彦先生（蕾軒と号せらる）の米寿の賀宴が先頃開かれたが、席上先生は「明治の精神」なるものに触れて所感を述べられた。先生の少年時を過ごされた尋常中学校（日比谷高校の前身）に於て、当時の校長勝浦鞆雄先生から修身の訓えを受けて感銘されたという次第である。則ち「立身、斉家、興国」の三綱領をモットーとせよということである。思うに立身は人間の形成であり、興国は国威の発揚の謂である。先生の全人格をもって学界に寄与し、漢薬の研究において、地衣類（Licfenes）の研究に於て世界に声名を馳せて居らるるは興国に非ずして何ぞ。明治、大正、昭和の三代に亘って今なお日夜研さんに暇なしと言はるるものこそ明治の精神、バック・ボーンの具現であろう。幕末のわが国は累卵の危きにあった。これを救ったものは英知の賜物であるが、明治の政府は学問によって立身と殖産を計るに急であった。福沢の「天は人の上に人を造らず、人の下に人を作らず」の自由平等の思想も個人主義も功利主義など諸々の外来思想も唯だ輸入されたというに止まり、只管富国と強兵の道を歩んで、大正と昭和の初期澎湃として起こった民主主義、民本主義も軍国主義のもとにじゅうりんされた。

漱石は「こころ」の主人公をして「明治の精神が天皇に始まって天皇に終ったような気がしました」と言はしめているが、当時の外国の文明批評家も同じ言を発したと記憶している。果して明治の精神は一代にして消滅したであろうか、私が始めて教職に就いたとき当時の校長から訓えられたものに「国士」の精神がある、即ちエリートの精神である。敗戦後、めざましい復興を遂げさした一因として明治の精神が脈々として残っていたが為めと認めることもできるのではないか。勿論この精神も両頭の刃であること、恰も毒から薬が、薬も用い方によって毒となると一般である。ある人は今の時勢を元禄時代に比する。文化の面で誇るべき時代ではあったが泰平に陶酔し享楽にふけり、この時代を峠として江戸幕府は没落へと急ぐのである。時代は揺れ動いている、正と邪、真と贋の価値判断を下すに困難を覚えるほど時代は複雑である。附焼刃の民主々義に対する批判力を養うのもエリートともいえる諸君の務めである。

人事移動

男子部　女子部

男子部

常勤任用		
久津間輝雄	助教授	合成薬品
嶋田　健次	助手	薬品分析
西郡　秀夫	〃	薬物学
岩原　洋子	実験助手	微生物学
小田切忠仁	〃	薬品化学
金沢　幹子	〃	生薬学
須藤百合子	〃	生化学
槌本　衛	〃	体育学生課
深山　敏子	実験助手	放射薬品
山田　健二	〃	薬物学
若林　祥子	〃	薬剤学
滝田美恵子	幅手	薬物学
土井善喜子	〃	衛生第一
粟飯原英一	警備員	
非常勤任用		
松田　信行	兼任講師	数学
南部　祥一	〃	衛生工学
大宮　利通	〃	商品学
常勤退職		
新保　正府	助手	薬品化学
川田久美子	実験助手	衛生第二
伊達百合子	〃	薬物学
山口　敏代	〃	薬剤学
森田　衛	事務	学生係
非常勤退職		
幣原道太郎	教授	英語
山田　欽一	兼任講師	数学

女子部

常勤任用		
不破竜登代	教授	薬剤学
市川　紘	助手	薬化学
伊沢　慶枝	実験助手	生薬学
川奈部佳津枝	〃	衛生化学
倉橋　昌司	〃	薬物学
佐多　和子	〃	生化学
薗部　文恵	〃	〃
村上美智子	〃	薬物学
山下とし子		〃
染野　静司	運転手	
非常勤任用		
唐津　邦利	兼任講師	教育学体育
中野　暁雄	〃	ドイツ語
常勤退職		
佐野　章子	助手	生化学
嶋田　明子	〃	元素分析
大野美智子	実験助手	衛生化学
小川　清子	〃	生化学
高須　久江	〃	薬理学
原田　文広	補助員	薬化学
非常勤退職		
佐藤　良博	兼任講師	構造有機

四十二年度卒業生の就職状況

女子部

東洋高圧工業	一名
マックスファクター	一名
日産化学	三名
ライオン油脂	一名
ミツワ石鹸	一名
三井石油化学	二名
オリエンタル写真工業	一名
花王石鹸	一名
保土谷化学	一名
持田製薬	一名
和光純薬	三名
和光堂	二名
三共	一名
武田薬品	二名
佐藤製薬	一名
興和	一名
ヘキストジャパン	一名
日本レダリー	一名
サンド薬品	一名
バイエル薬品	一名
東京女子医大第二病院	一名
聖路加国際病院	一名
板橋日大病院	一名
関東労災病院	一名
東京都済生会中央病院	二名
駿台日大病院	四名
東京医大病院	二名
東薬大研究室	一名
順天堂大研究室	一名
東大研究室	一名
群大研究室	一名
薬局	七名
家業従事	九名
大学院	三名
無給研究生	六名
その他	五名

男子部

協和醗酵	五名
新日本実業	一名
ダイエー	一名
興和	二名
武田薬品	三名
三共	四名
全薬工業	二名
スズケン	二名
東京田辺	一名
日本メルク万有	七名
三共有機合成	一名
日本ヘキスト	五名
プピリオ化粧品	一名
ゼリア	一名
塩野義	一名
山之内	三名
ミドリ十字	一名
三宝製薬	一名
明治乳業	一名
第一製薬	二名
シャンソン化粧品	一名
日研化学	一名
富士化学工業	一名
ダイナボット	一名
中外製薬	一名
藤沢	二名
大正堂	一名
日本レダリー	三名
住友化学	一名
ライオン歯磨	一名
科研化学	一名
日本アップジョン	一名
日本ブリストル	二名
水道局	一名
帝国臓器	三名
エーザイ	二名
大日本製薬	一名
持田製薬	一名
長瀬産業	一名
三和化学	一名
日立化学	二名
吉富	一名
台糖ファイザー	一名
大成薬品	一名
茂木薬品	一名
サンド薬品	二名
第一化学薬品	一名
日独薬品	一名
杏林薬品	二名
鳥居薬品	一名
衛生試験所	一名
県庁	二名
保健所	一名
自衛隊	二名
東京医大病院	二名
前野病院	一名
市立旭川病院	一名
同愛記念病院	一名
慶応病院	一名
家業	十八名
薬局	九名
東北大学	一名
東大分院研究生	四名
東大病院研究生	九名
東大薬学部研究生	一名
東洋漢方研究所	一名
開局予定	一名
進学予定	九名
東北大学大学院	一名
東薬大学院	十二名
東薬大助手	一名
未定	四名

五月十三日　定例学生総会開かる

―女子部―

五月十三日（月）、大講義室にて、定例学生総会を開いた。全学生数七九三名のうち三九八名の出席者を得て総会は成立した。

総会内容は
一、議長団選出
二、執行委員紹介
三、自治委員会常任議員団紹介
四、自治会基本方針
五、予算決算承認
六、東薬祭運営委員会紹介
七、議長団解任

以上七項目であり、すべて承認された。

今年度**自治会基本方針**の内容は次の通りである。

一、正しい医療観・医療知識を身につけるための薬学教育をめざす。

(1)薬学とは何かを追求していこう。

①薬学概論ゼミ（or薬学教育シリーズ）を本年度もひきつづき企画して、薬学を体系づけて学べるようにする。

②実社会での薬学の果す役割を学んでいく為、民医研を中心とする集団検診・院所見学に積極的に参加し、また製薬会社研究所訪問をする中で、現場の人々との交流を深める。

(2)卒論を充実させよう。

①今、停滞している卒論委員会をたて直す中で、卒論の意義・現状どうあるべきか?を全学友の参加のもとにほり下げていくようにする。

(3)一般教養を充実させよう。

①理科系学生にとって不足しがちな、人文科学・社会科学は人間形成に欠かすことのできないものですが、現状は充分とは言えません、そこで本年度は各種講演会、読書会を多く設けていく。

二、楽しく豊かな学園生活をめざす

(1)食堂を改善しよう。

①食堂委員会を早急に確立して生協活動の一環としておしすすめていく。

②各学年より3名位ずつ委員を選出する。

(2)クラブ・サークル活動を発展させよう。

①学生ホールを使いやすく部室数をふやすために、合理的に配置がえする。

(3)勉学条件を改善しよう。

三、文化・スポーツ活動を旺盛にまき起そう。

(1)学内セミナー・映画会・講演会、その他を学友の文化的要求に答保て企画していく。

(2)東薬に欠けている縦のつながりを強めていく。例として、選別コンパ、成人を祝うつどい、先生方との交流の場。

(3)東薬祭を全員の手で成功させよう。

(4)他大学との交流を深め、特に東薬連には積極的に参加していこう。

(5)スポーツ活動としてはスケート教室、スキー教室を設けていく。

四、平和と民主主義を考えていこう。薬学生であると同時に、社会の一員である私達は、会社会で何が起っているのかを、当然知っていかなければなりません。多くの学友とともに、政治社会問題、日本の採高を考え、討論する場を設けていく。

五、自治会の民主的運営をめざす。(1)自治委員会を確立して、クラス討論を恒常的に行なえるよう強め、クラス新聞を発行するその他の創意的なクラス活動を活発に起し、自治会を土台からささえていこう。

(2)自治会とは何かを学んでいく為に、再度自治会規約を認識しよう。

(3)自治会機関紙『?』（名称未定）を、定期発行し、常に自治会の活動を全学友に知らせていく。

(4)私達のかかえている様々の問題を解決していくためには、学内のすべての組織が互いの立場を尊重しつつも協力していくことが必要です。（自治会・学友会・桜木寮etc）

薬味

立夏もすぎ、つつじが我々の目を楽しませてくれる今日このごろ桜の花と共に迎えた私達の新しい仲間もすでに学園生活一ヵ月を過ぎようとしている学園生活にもなれ実習のあい間に息ぬきをする術も覚えた頃であろう

地方出身者が半数を占める学校では、新人生も一ケ月の期間を経てほぼ親元を離れた心細さや孤独感から解放され、学校の授業や生活自体に喜こびを見出す時期でもある。自らが地方にいて見る尺度と新しい環境で新しい友人と異なる尺度で話し合えば己ずから新しい価値を生じ広い世界を構成する複雑な機構を見出せる。政治、文化の中心である東京で、地方では感じとれない多くのことを敏感にじとれることが数多くある。地方にいて新聞、テレビで見たり聞いたりするよりも、目のあたりで見聞きする方が、実感として我々により大きく影響を与えるし、無関心でいられなくなるはずである。

しかし、これだけに我々がよけいそういうものに、踊らされる危険性もある。実習、授業という毎日に忙殺され、そういうものに目を向けることすらも忘れがちである大学構内に、自衛官のジープがあっても何も疑問を感んじず、無関心ででも平気でいられるという生活状態になりがちなのである。

大学の内外にわれわれ自身を束縛し、行動の自由範囲を狭ばめてゆくいろんな要素が実在しているこれらの要素の中に身を委ねて自分自身の立場を危うくしてゆく思考形態は自らが創造した価値を自らが放棄してゆく結果を招く。

現代人の心理的メカニズムを、＜他人志向型＞といった人がある他人志向とは他人によって指導される人間の性格構造であり、社会環境からレーダーのように信号を受けとり、そのメッセージに従って行動する型である。そして、彼を支配するものは、もはや伝統ではなく、内的な信念でもなく、漠然たる＜不安＞である。

ある電気メーカーから、ゴキブリ退治の新兵器が売り出された。箱の中に果物の食べかすなどのエサを入れておき、ゴキブリが、その中に入った途端に壁の電極板に触れてストン。逃げだそうとはい上るとビリリーとくるのがその効能がきとか……。

ゴキブリは、自らの集団の動きに順応しなければ生きてゆけない常に他の人間の動きをみて、それにならって生きている習慣になってしまった人々は、果物の食べかすにつられて電撃を与えられるゴキブリの群れと同じである。こういう人達は、常に「例外者」にも「単独者」にもなり得ないのである。常にビリリーとくる電気を怖れ、自分の手の届かない、自分を超越した集団組織に自分の生活水準を負うている。人間にとって一番大切なのは、たった一度しかない自己の人生をいかに自分の納得できるように〃いま〃生きるかという「自己」の「自己」にかかわる問題なのである。

書泉　SHOSEN　294-0011(代)
千代田区神田神保町1～3（神田日活前）
振替口座　東京4968番
書泉　理工学書部　294-0014
理工学図書及雑誌の専門店
書泉ブックマート
294-0015(代)
千代田区神田神保町1-21スルガ台下角
4階　美術・家庭・児童
3階　辞典・参考書・図鑑
2階　理工学・医学・農業
1階　雑誌・文学・文庫
地階　法律・経済・社会

■私は本誌を推薦します■

百瀬　勉（九州大学教授）
大学における専門課程の教育は、学問の基礎から始めて最近の進歩にまでおよぶのが理想であろうが、近頃のように課目数が急増し、しかも教育年限は昔のままという状態では、いきおい教育時間の短縮をきたし、その取捨選択になやまされる。また学問の進歩につれて個人の専門領域はますます狭くなるに反し、他分野の学問との関連がますます密接になるという状態になっている。したがっていずれの大学でも完全な専門教育は不可能で、いずれかに多少は片寄っているものと思われる。この意味で本書のような特徴をもった教育法の出現はまことに意義があり、学生諸君に一読をおすすめする。

刈米達夫（京都大学名誉教授）
金子太郎（神戸女子薬科大学長）
木村康一（前京都大学教授）
高柳義一（東北薬科大学長）
不破龍登代（東京薬科大学教授）
宮道悦男（大阪薬科大学長）
村山義温（東京薬科大学名誉学長）

★新鮮な内容・やさしい解説★
化学・薬学生のための教養誌
季刊（1・5・9・11月発行）　300円
化学と薬学の教室
購読料（1年分）1,200円（送料共）

本誌は化学・薬学を専攻する学生の課外の読み物として、講義や専門書では短時日に、また十分に習得できない新しい広範な知識を自然と身につけさせることを意図して刊行された。新しいこと、基礎的なことを初歩の者にも理解できるようにわかりやすく解説し、通学の途上や睡眠前のひとときにも気軽く読めるように編集してある。

第1～19号好評発売中

この雑誌だけは、第1号よりおそろえ下さい。系統的に学べるように編集されております。既刊の号は第1号より常に用意してご注文をお待ちしております。

―第19号主要目次―
座談会：化学勉強法総論
有機合成の魅力③……小林義郎
無機化学のすすめ(Ⅱ)……本田雅健
大学1年の化学(Ⅴ)……松浦良平
有機化学者のための反応速度論(Ⅳ)……稲本直樹
有機化学者からみた分子軌道法の考え方(Ⅱ)……河西三省
化学英語のABC(Ⅳ)……宮野成二
薬物感受性(Ⅲ)……岩本多喜男
薬学概論（その5）……宮木高明
対訳：メイアン大学の化学……塩見賢吾
対訳：デュワー新しい化学入門……竹内敬人
分析化学のポイント(Ⅳ)……辻章夫
有機化学(Ⅰ)……吉名・田中
九州大学大学院薬学研究科修士課程入学試験問題

東京都文京区本郷3-27-14
振替東京82694番
廣川書店

論説

否定的状況を踏まえ人間性回復の志向を

新入生へ

非人間的な受験勉強を終えて、東薬に入学された新入生の諸君に対して、新聞会は「入学おめでとう」等の虚飾に満ちた歓迎の言葉を持ちあわせていない。それはわれわれを取りまく状況があまりに重く暗いからである。ベトナム戦争がジョンソン声明にもかかわらず、依然として泥沼化し、国際経済体制は、ドル、ポンドの危機状態にある。この様な流動下にある世界の資本主義体制の中で、最も脆弱性の一環にある日本資本主義は、その矛盾を次々と露呈している。国民の面前に明らかな物価高、国鉄労働組合の合理化、中小企業の倒産等、内的諸矛盾をふくみながら成長した日本の資本主義体制。その体制は、資本主義の構造的欠陥により生じた剰余生産品、遊休施設を供給物として、アジアの諸国へ侵出している。佐藤内閣はその具体的現実化として、日韓条約を締結し、経済援助という虚名の下に、異民族への再侵略、再抑圧を開始している。昨年秋の佐藤首相の南ベトナム訪問は、ベトナム侵略戦争への直接的加担の立場をよりはっきりと示している。アジアへの侵出を図ることで、支配者階級は、日本独占資本の強化、アジアにおける政治的、支配力の獲得、経済市場の確保を必然的結果とする。対米従属の度合を深める佐藤内閣は「日米共同責任論」を強調し、砂川の米軍基地が拡張されようとし、北区の王子には野戦病院が開設されている。

基地沖縄では、同胞沖縄県人の犠牲の下にB52等の戦闘爆撃機が発着している。支配者階級は、国内で、資本主義体制からくる構造的欠陥が激化してくると、イデオロギー的側面をうちだしてくる。教科書検定にみる中等教育の反動化教育、期待される人間像、紀元節復活、明治百年のキャンペーンと、反動化政策の一連が続く。佐藤内閣を頂点とする日本の支配者階級のより苛烈な攻勢に対して、反体制側の既成政党は、何等有効なダメージを体制側に与えていない。ブルジョア階級との妥協的産物である平和共存路線に基づく、一国社会主義を主張している日本共産党。日本における唯一の前衛党イコール日共の神話は60年安保闘争によって瓦解した。さらに日共は組織拡大それ自体を目的化し、日本の国家権力の本質を分析しえず、米帝からの独立を唱えている。一方、社会党はブルジョア憲法を絶対化し、議会主義の域を出ていない。現時点において、「平和、民主々義」の擁護という問題設定が無意味である。これら体制内の反体制でしかありえぬ既成政党の堕落、腐敗の状況の中で、反日共系全学連の思想的根拠は重大視される。ブルジョア新聞、その他のマスコミは、こぞって彼等の行動を、暴力的と一方的にきめつけ、権力と癒着した報道を続けている。

昨年の二度にわたる羽田闘争、今年に入って、佐世保でのエンプラ寄港阻止闘争、成田、王子での闘争においては、官憲の不当な弾圧によって数多くの学友が傷つき、獄中にある。権力者は、凶器準備集合罪、公安条例等を適用し、騒乱罪・破防法を検討している。エン・プラ寄港、王子の野戦病院開設が、アメリカ帝国主義と不可分にある日本政府のベトナム侵略戦争への積極的介入であることは、明白である。帝国主義段階に入るに必然的に伴う軍備の拡張は、第三次防衛計画の下に漸次膨張している。さらに、アメリカ軍から日本の大学に資金援助が入っていた事実は、大学内で軍事研究が行なわれていたことに他ならぬ。今回の国大協の大学自治に関する内容は、官憲の学内導入もやむをえずとし学生を一方的に処分することで、大学の自治を守ろうとしている。権力者と癒着した大学当局は、一部の活動家学生によって自治がくずれさっているとも述べている。東薬においても自衛官が在籍し、制服の自衛官がジープで大学構内に乗りつけている現状にある。これは東薬が軍学共同路線に組み込まれ、大学の自治が自衛隊という外部権力機構の大学侵入によってもろくも崩壊している現象を示している。われわれ東薬生が、掲示物あるいはビラ等を配るときは、必ず学生課の許可を受けること、掲示物は大学当局が決めた場所にしか掲示できないと学則できめている。これらは東薬において学生の言論の自由が認められず、ひいては学生の自治権を大学当局は奪い取っている。今年の入学式の日、寺阪学長は新入生に対して政治活動をいましめ、文化部門のクラブには入部せず、体育部門に入るようにと述べている。大学内におけるサークル活動（文化部門）は、資本の要請による薬剤師という専門奴隷化を拒否し、東薬の自治回復を、人間性の獲得を志向しているのである。われわれは、専門分野である薬学だけを学べばいいのではない。毎日化学構造式を学び、一人の薬剤師となることは約束されている。大学内で薬剤師というレッテルをはられ、安価な商品と化して社会へ送りこまれようとする。薬剤師という技術者が同時に生活者として企業体内に送りこまれるとき、両者が利潤追求の内部で結合している限り「個性」など存在する余地さえない。われわれの現実社会での行為は「資本の論理」に従って搾取されていく。ここに人間疎外、個性の埋没がでてくる。

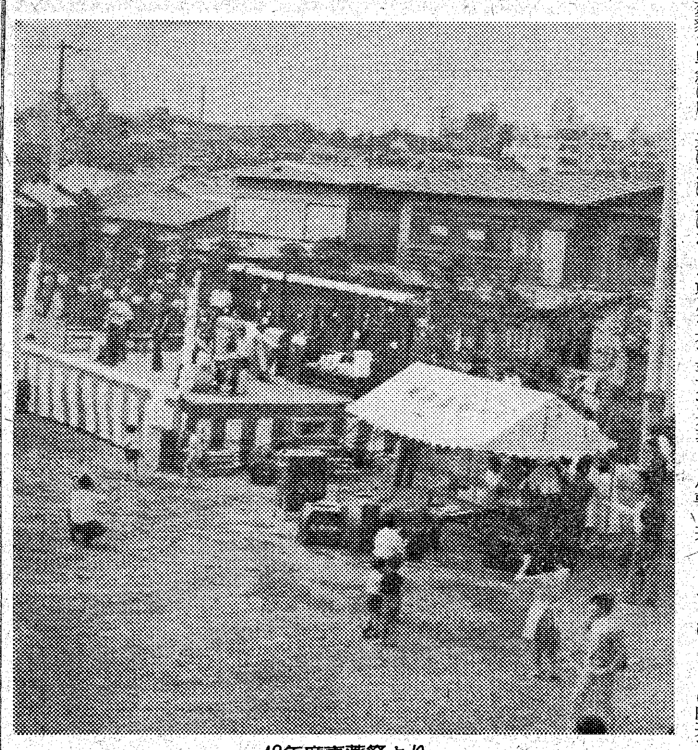
戦前における大学卒イコール特権階級という既成概念は崩壊し、今日では、大学卒も一般労働者となる。自己の学問をわりと自由に追求できる大学において、大学当局が、反体制への志向を閉ざし、体制順応な学生を一人でも多く教育すれば、それだけ大学に対する産業界の要請は多くなる。ここにおいて私学のもつ営利追求の性格が集約的に表われてくる。東薬に表われている大学の自治のなしくずし、学生イコール安価な商品とみなす大学当局の教育方針は、支配者階級が必要とする大学の帝国主義的再編成の一環を担っているのに他ならぬ。資本の自由化の中で、強力な国際競争を求める日本独占資本は、国家権力と結託して、大学の帝国主義的再編成の攻勢をかけている。再編成期を迎える日本帝国主義は、大学の再編成をもくろみ、大学そのものを産学共同路線にくみいれていく。さらに支配者階級は、大学の機構そのものを、国家権力の統制下におこうと図っている。現在、われわれを取り囲む社会的状況は、一見平和的、天下太平ムードにさえ思えてくる。

体側は常にわれわれを日常性へ埋没させようとさえする。ベトナム特需による虚偽の繁栄を続けている現在、幻想的な共同体である国家のからくりの秩序を根底的に把握し、かつそれらからの決別の理論を行動を追求していかねばならぬ。

学長の言からも明らかのように体制順応な薬剤師を一人でも多く社会へ送りだそうと大学当局はもくろんでいる。さらに学生の自治権を奪取し、大学当局の官僚化を一方におし進め、われわれ学生は、隷属と屈従の秩序の中へ、押し込まれているのである。新入生諸君、今こそ総体的な歴史の中で自己の存在を確認しつつ、真の人間性回復の理論、行動を追求していかねばならぬ。

東薬祭における"統一テーマ"に関する考察

東薬祭運営委員長　吉村博之



42年度東薬祭より

テーマは"東薬生の精神的自立"、"サブ"テーマは薬学教育問題"、"七〇年安保を考える"となりました。

若者が生きるにあたって、いつまでも一つの既成概念にとりつかれて、目前の安泰のみを望むならば、我々は生涯において何も確心を得ることは出来ないであろう。学問をするにおいても、クラブ活動をするにおいても、我々に必要なことは、何等かの型で信念を持ち、昨日より今日を、今日より明日に向って自分達で可能な限り精一杯前進をする努力であろう。我々の生は偶然にしろ、その存在なり、対社会的かかわり方は、現実を生き続ける以上は偶然性では片付けられはしない。

あらゆる意味において、現代は霧深き混迷の時代だが、我々若者にとって今こそ社会の内で自らの変貌を早急に成し遂げなければならない状況におかれている。

学生において必要なことは、精神と技術との両面が調和してゆくことであり、それをいかに実際的効果として用いてゆくかにあると思い、また、われわれ個々が、実践の伴った人生経験を積み重ね、目的意識を持った積極的な姿勢に欠ける点にも大きな問題がある。自身で心の内の怒りとの葛藤を続けて、この無気力な沈滞ムードを打破するような思考を開始する時ではないだろうか。われわれは、社会の風潮なり、慣習なりを迎合し、押し流されているのでは真の"人間性"なり"人格"は形成されない。われわれには社会生活を過して行くにおいて、一個の社会人としての責任なり義務が課せられている。為に、社会的問題を考える時、一人の人間として自身の次元に問題を還元して、責任ある態度を示す努力が是非とも必要なのだ。われわれは、直接自分の利益となるような問題―あらゆる社会問題の原点は同一平面に在るのだが―にだけ参加するのではなく、視野を拡げて、われわれがつくるであろうこれからの歴史に恥じることのないような日常性が重要であり、その表現は、一部学生活動化と言われている人々が行っているような暴力的展開やサロン風的な展開での解決は困難であろう。もう一度自己の存在位置を認識して、解らないことに眼をつぶることなく一歩一歩確実な判断の元に進歩を続けて行くことである。

"薬学教育問題"と成ったのは"公害""薬禍""医薬分業"等の問題を取り上げる前に、もう一度、"薬剤師の使命、存在性""生命を預かる者"という観点から考え直し、基礎意識を徹底的に学んだ上でこそ討議・研究発表出来ることだということに由来する。

サブ・テーマのかかわり方だが、われわれの世代は、その事が政治的実は、単に政治的のみならず安保条約は、日本人個々の文化にまで侵入して来るものであるが―であると直接的にではなく、二、三枚のヴェールをへだてて見る傾向が強い。政治的な対象に対してアレルギーを起してしまい日和見主義的な日常性のみしか持得えない現状の多くの東薬生にとって、

"七十年安保"は、真に自分達がいかにこれからの歴史に対して―自身の一社会人としての責任の在り方―関与して行くかの具体的な例となりうると思う。東薬生の中にも興味半分でデモに行く愚者もいる。われわれが賢明でありたいと望むならば、われわれを取り囲く―好むと好まざるにかかわらず―周囲の出来事に対して、常に敏感であり、あさはかな一夜漬け的な知識により、時の流れに巻き込まれて、賛成だとか反対とかに決め付けない事だ。少なくとも、二十才以上の選挙権のある者にとっては、社会的な事柄に対して、ある程度の知識を持つのは義務であろう。ここでも必要なことは、われわれ学生の無気力化からの脱皮であり、"自己変革"である。東薬生の中には、自称政治通はかなりいるというが、彼等の多くは何一つ前進的な考察を持たない。やはり、彼等も無気力なのだ。自分自身の主義なり主張なりを自信を持って正々堂々と表現出来るように生きようではないか。

我々にとって必要なことは、外の不正と闘うことでなく、我々の内に在る不正なり、共犯者と闘うことである。仏の知識人―知識人の定義なり、役割りはまことにあいまいだが―が言うように、"沈黙は共犯者"ということだ。また我々が社会的思考を持つ時、"この世界が日常性の集積である"そして、吉本隆明の言うところの「思想というものは、極端にいえば原理的にあいまいな部分が残らないように世界を包括していれば、潜在的には世界の現実的基盤というものは、本来そういうものをちゃんと獲得している……思想だ。そういうことがなければそれは思想といえないのだと思います。」「範疇として固定化するわけではなくて原理的な思想の中へ状況の問題が絶えず繰り込まれていかなければならない。そうしなければ原理としての明断さは保持できない。」という理念が必要であろう。"原理"と"状況"、"経験"と"状況"の間には、相互に交通し合うが、そこにかかわるものとして、やはり日常性の特質が在る。

現代社会の問題として、"細分化"され、"マス化"された人間に対する不安、不信がある。そして"もの"に対する信仰がある。この"もの"に対する信仰は、現代社会の持つテクノクラシー的傾向と結び付いて我々の心の中に着実に定着化しようとするのである。もし、現在存在している"もの"だけが我々にとって確実であるとすれば、民主主義も、ただの制度という"もの"としてのみ存在することがらになってしまうだろう。その時、我々が忘れてしまうのは制度をつくり、ささえている人々自身の日常性であり、それと関連する"原理"であり、又"経験"である。そして、そのことは、"人間自身"の否定となってしまうと言えるのではないか。

反復するが、現在の学生運動の在り方だ。社会の制度なり、権力を治めるものが一方的に悪いからそれを全てだとして闘うのは全く意味がない。しかし、一方、他集団における"暴走"は、どうか？―"暴走"を非難する時、根本的前提として、戦わない人間（機動隊との衝突のみが戦いでなく、自己の内部の戦い）が、戦う人間を非難罵倒することは、まことに問題外である―その闘争の実践があまりにも自分の実存的な疎外をストレートに静命に結び付けすぎていると思う。やはり、政治的行動―ありとあらゆる、社会的行動の一例としての―において、自分を絶対化せず、自身を突き放して客観化することが必要である。だから、彼等が前衛的だとしても、人民大衆を動かすことはできないであろう。反戦にしてもそうだ。ベトナム戦争をみる時、我々は直接戦争終結―だから、平和な国土になったとはいえないが―にという立場にはいない。しかし、その問題を内面化して、我々自身の問題とし、我々自身の"自己変革"に転化する努力は必要であろうし、可能だと思う。

前述したが、"七十年安保を考える"は、政治的問題として取り組むのではなく我々学生にも当然必要な対社会的認識の一具体例として対処して行くのである。我々が、薬学生だからといって社会的側面に対して、無関心・無責任であって良いというアリバイは全くない。近代人の自由は、"統一的概念"や"史的一元論"のような一神教的な状態から解放されて、個人で数多くの価値の体系から任意に自由を選択することが出来る。それだからこそ、自己の自主性が、主体性が要求されて来る。その反面、我々の思考のうちに同時に絶望・逃避・自嘲・懐疑等の近代科学の持ち込んだ毒としてニヒリズムの数多くの表現形態がある。しかし、ここでも我々若者にとって望ましい姿勢はやはり、自己の日常性の存り方―自主性なり、主体性―であると思う。自分の存在を主張したいと欲するならば、それだけの思考を持ち、行動をするべきなのだ。

以上の様な観点から"統一テーマ"を考えているのです。従って必然的に東薬祭の展示の期間だけが"統一テーマ"の日ではなく、それまでの数ヵ月をいかに、充実したものにするかに比重は置かれる。統一テーマの計画としては、前期は、"薬学生の自覚・認識""薬学生の社会的存り方"を、薬学概論的講演会やゼミ、映画等を通して行ない、十月よりの後期には、"社会的自覚""社会的姿勢"を、講演会や討論会を通して行なって行きます。

国際反戦統一行動行なわる

全国で学園スト

4・26

四月二十一日より始まった国際反戦統一行動日の二十六日、全国各所に於いて沖縄、ベトナム反戦世界学生ストライキ統一行動が繰りひろげられた。これは反代々木系全学連の主張を中心とした統一行動で全国二十七大学においても「授業スト」や「授業放棄」等が行なわれた。又、明治公園と日比谷公園では三派系全学連、清水谷公園では革マル系全学連、構改派の自治会共闘の学生らが、それぞれ集会、デモを行なった。この4・26闘争は、「アメリカの学生反戦組織の国際統一行動の呼びかけに応えて日本の地でベトナム戦争に反対する反戦平和の意志を総結集して闘おう」という意図のもとに又これに続く四月二十八日は「沖縄デー」と呼ばれ、「日本政府の"核基地つき沖縄返還"策動に反対して沖縄人民と連帯して、沖縄祖国復帰をめざして闘おう」という呼びかけのもとに行なわれたものである。これに対して、代々木系（＝民青系）全学連は「反代々木系全学連（いわゆるトロツキスト）はすなわち"統一行動の破壊者"である」として、反代々木系全学連との共闘を拒否した。

一方、早稲田大学においては、連日この4・26闘争におけるスト権確立をめざして各学部において演説やビラ等によって呼びかけを行なったが、民青系全学連との分裂などにより結局、革マル系全学連が主流をにぎる文学部のみでスト権確立が決定した。この日は朝から学部前にバリケードを築き「授業スト」を行ない、登校する学生にスト協力を呼びかけていた。また本部前においても集会がひらかれ昼すぎ、それぞれのコースへデモに移っていった。文学部では六時半より二文自治会主催の集会が行なわれたが、ベンチに座る者は少くほとんどの人が流し目に、あるいはしばらく足を止めていってしまうという状態であった。また一たんはスト権確立に賛成はしたものの、いざバリケードが築かれ授業がうけられないとなると、欺瞞を感じ、ためらう学生と、バリケードを守る学生との間で激論をたたかわす光景などもみられた。

4・26早大全学スト行なわる

四・二七沖縄デー前夜祭

4・27

総評に結集する労働組合とその他反戦運動を行なっている団体、労働者、市民、学生、一万名は、二十七日午後六時より、日比谷公園でアメリカ政府のベトナム戦争に抗議し、「沖縄即時無条件全面返還、核基地撤去」を要求する集会を開いたのち、アメリカ大使館、国会、さらに都心に向けて抗議のデモ行進を行なった。この集会は国際反戦統一行動の一つとして行なわれたもので、各地の青年労働者、沖縄青年同盟、総評の堀井議長、社会党の勝間田委員長が挨拶し、「アメリカ帝国主義のベトナム侵略を鋭く暴露し、佐藤参戦反動内閣を強く非難し、アメリカ帝国主義に反対して闘っているベトナム人民支援を強化するためにはすべての闘う青年労働者が、広範に結集し、統一行動を強めなければならない」と強調し「沖縄即時無条件全面返還、核基地撤去」のスローガンを口々に訴えた。佐藤政府は、これらの青年労働者の行動に備えて、首相官邸、国会、アメリカ大使館に、それぞれ多数の装甲車と、千数百名の機動隊を配置した。

さらに数千名の機動隊を動員して、デモ隊をサンドイッチにはさんで「規制」した。デモ隊は、この機動隊とはげしくもみあいながら、すきをみてジグザグを行ない、機動隊とぶつかりフランスデモを行なった。アメリカ大使館の前では、たちどまって「アメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争反対」「沖縄即時無条件全面返還、核基地撤去」の声を張りあげた。

その後、デモ隊が、数寄屋橋にさしかかると、沿道の都民は、デモ隊に好意をよせ、ある人は、デモ隊に加わり、またある人は、機動隊を糾弾していた。多くの都民は、口々にアメリカ政府のベトナム戦争に反対すると言っていた。

執行部反省文求めらる

新入生オリエンテーションに関して

女子部

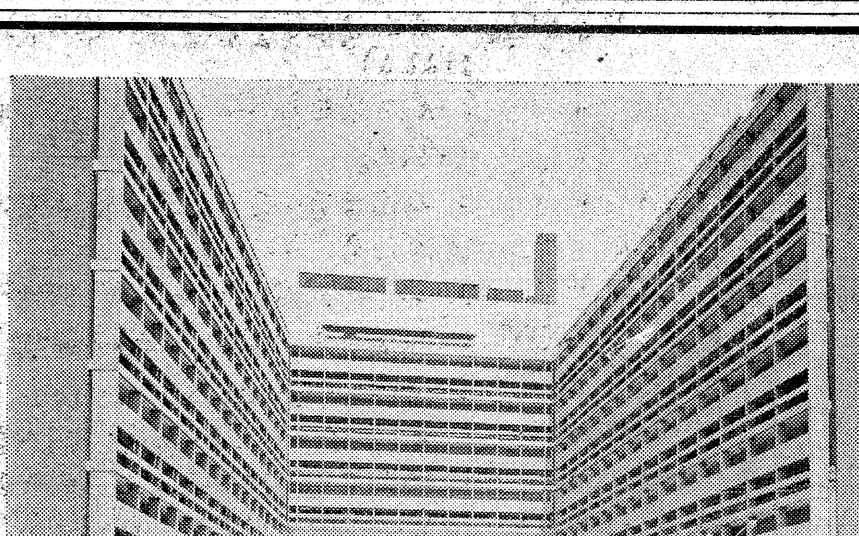
四月十三、十五日にわたって女子部執行部主催で行なわれた一年生を対象とする「新入生歓迎オリエンテーション」において、学外者を招くことを事前に学生課へ届出なかったことに関して、教授会及び、学生課長より女子部執行部に対して反省文の提出が求められた。この"オリエンテーション"は、「新学期に際して、新入生に対するクラブ紹介のための時間をもらいたい」ということで、執行部がその目的、内容を文書にして教授会に要求し、承認されたものである。従って、会の進行その他は執行部一任の形となっていた。しかし、文書には学外者を招くことが記されていなかったとの点で、この"反省文提出"の問題となったわけである。学生便覧"学生課に関する事項"によると、学内における各種の集会を催すときは、責任者を定め、所定の用紙を用いその目的、日時、会費などを三日以前に学生課へ届けその許可を受けなければならない。また集会場所の使用はあらかじめ事務長の諒解を受けておかねばならない」とある。従って、執行部としては、文書に記されていなかったとはいえ当然認可されたものとして学外者を招いたものである。

学生課ではこの点において、事前によく調査しなかったことの非を"補導の不完全"として認めた。しかし、学校側は「公式の場に無断で学外者を招いたこと」また「自治会紹介を自分達で行なわず学外者を招いて行なったこと」などの点を重要視したためである。これに対する執行部の見解は次のようである。

四月十三・十五日の新入生歓迎オリエンテイションは執行部歓迎実行委員会主催で実施された。これにとり組んできた基本的立場は規約にも述べられているように、"学生の文化活動、学術研究並びに科学の創造的発展を推進する"（女子部自治会規約第二条二項）及び"学問の自由を守り学園の自治及び学生自治権の擁護"（同規約第二条四項）のために"学生自治会の責任ある自主的運営を通じて"（同規約前文）企画したものである。今回問題となった四月十三日の自治会紹介は、新入生に大学生活で欠かすことのできない自治の問題を少しでもつかんでもらいたいと考え、東大より講師を招き話してもらったのだが、連絡に手違いがあり、テーマとは異なる内容で行なわれた。この点、新入生にはとまどいがあったと思う。

数日たってから、学生課に呼び出され、講演をやる事は聞いてなかったということで連絡が不充分だった点に関して反省文を求められた。この問題に関して執行委員会は何度となく会議を開き話し合ってきた。そして今日までの討議を通じて、結局問題点は、"自治とは何か？"の自治会の基本点に集中され、この点での解釈いかんによって今回の反省文問題のとらえ方が異なるということである。自治会規約と学則の矛盾をどう考えていくべきなのか。私達が行使すべき"自治"とは何なのか。反省文問題は、私達執行委員にとって、改めて自治活動とは何なのかを深く考えさせた。今度、諸活動を通じて学生の利益を守る為の責任ある自主的運営（規約より）について深く追求していきたいと思う。

若さの…伊志井寛さん
老化を防ぐパロチン錠
パロチンを補給して、体全体に青年時代のあの若さをとりもどしましょう
1錠中唾液腺ホルモン5mg 含有・120錠
帝国臓器
東京・赤坂局区内



研究所

健康に奉仕するシオノギ

常に人々の健康を守るために必要な最もよい薬を提供する――この一貫した基本方針のもとに、シオノギは研究・製造面はもとより、販売面において、真に消費者の健康と利益を考えた活動を行なっています。
これは一般に"シオノギのDetail活動（学術説明活動）"と呼ばれ、その担い手となるDetail manの高い能力と誠実な態度は、関係各方面の強い信頼をかちえています。
シオノギ製品を正しく使用していただくため、医師・薬剤師の方々に正確な資料と知識を提供するDetail manの仕事は、学問的に徹底した技術サービスを追求する純粋な学術活動であり、仕事を通じて自己をみがき、成長するという意味では、最高のものといえます。

来春の大学卒採用について
☆募集要項
勤務地　京浜・名古屋・京阪神等の主要都市
職種　Detail man（学術説明員）
採用学科　薬学系
人員・期間　特に制限しておりませんので、なるべく早くお申し越しください。
問い合わせ　詳細な資料をご希望の方は、ご遠慮なくお申し越しください。
☆待遇（男子学士課程）
初任給　33,000円（43年4月現在）
昇給　定期的に年1回行なっていますが、必要あればそのつど修正します。
賞与　勤続1ヵ年以上で年間6ヵ月程度。（1ヵ年未満の場合でも支給します）給与・賞与ともまったくの実力主義をとっています。
諸手当　通勤費全額支給。学術部員は1日約800円の食卓料が支給されます。
福利厚生　独身寮、社会保険が完備しており、健康管理も完全です。

シオノギ製薬人事部

本社／
大阪市東区道修町3－12
電話 202－2161（大代）

東京支店／
東京都中央区日本橋本町3－4
電話 663－3211

福岡支店／
福岡市上呉服町1 博多三井ビル
電話 2－6773

札幌支店／
札幌市大通西4－1 北海道銀行ビル
電話 26－1301

「大学の自治」問題を探る

二月九日、国立大学協会によって発表された「最近の学生問題に関する意見」は、国立・私立を問わず、各大学教授・学生のそれぞれの立場に微妙な影響をなげかけている。また東大を始めとする各大学の医学部紛争はじわじわと内在していた大学の自治の危機を露呈したのである。

現在、七〇年を前に緊迫した学外、自治能力を放棄しかけた学園。そしてその二つがつた[illegible]っ[illegible]いるという現実的社会状況にあって、われわれ学生にとっていかなる所に役割が存在し、どのような方法をもって把握して行くかは、われわれ学生に共通する問題である。（編集局）

権力統制下の大学

大学自治の危機

二次にわたる羽田闘争や佐世保闘争経過ののち、二月九日、国立大学協会第二常置委員会は、「最近の学生問題に関する意見」を発表した。その「意見」内容は**一**、学生指導の強化、**二**、一般教育の改善、**三**、学内規制の厳守、**四**、学生処分の徹底化　**五**、場合によっては警官導入も止むをえない　**六**、学内の政治闘争の禁止等が明らかにされ、又「意見」は「学園の政治的中立性」を強調している。そこで、今日の大学の自治、なかんずく「教授会の自治」と「学生の自治」という問題が、クローズアップされてきている。

大学の自治は、政治・言語・学問・研究の分野における憲法上の自由を基盤に制度的に確立している。しかし、戦後、日本帝国主義は、軍事的敗北によって、国家独占資本主義の体制を編成したために、大学は冷厳な経済的メカニズムに組みこれ、産学協同・自衛官の軍事研究による軍学協同、日米協力等の路線の上に乗り、決して社会全体に対しても、国家権力に対しても、譲ることのできない学問の自由即ち大学の自治の危機を招いているのは明確である。

大学の自治の先行理念となる「学問の自由」について明確にしよう。

「学問の自由」は制限・抑圧が葬られた瞬間に生まれたものではなく、又そのような特権が空間的にも内容的にも既定のものが存在しているのでなく、権力と民衆関係の中で学問的実践を通じて内容的に取得してゆく歴史的なものである。そして、また「学問の自由」とは、国民が真理を探究する自由であり、学問的な研究活動の自由であって、学問的見解の自由それの発表、表現の自由、学問的見解を教育することの自由がそのなかにふくまれる。この「学問の自由」を保障するために制度的慣行として、大学の自治がある。

ここで「学問の自由」を守り、また権利として勝ちとっていく担い手としての大学人の役割がある。すなわち、その構成者は、教授者と学生であり、当然「学問の自由」は、教授＝学生の相互関係によって守り勝ちとっていくべきである。なぜなら、大学は学生の存在を前提としているからでありまた学生に自治活動を承認して始めて大学教育、大学理念における教育的価値、意義を見いだすことになり、真の「学問の自由」は内部から成立し始めるのである。

大学当局の政府追従

教授会自治の形式化

現在、教授会は学校教育基本法五九条に大学管理と運営の法的権利と責任の所在として明記されている。しかし六二年六月、あきらかにされた中央教育審議会の原案は、大学運営の最高機関になっている教授会の権限を縮小し、これにかえて学長を全学の最高責任者し、学部長を学部の責任者としていた。そして評議会・教授会を学長、学部長のたんなる諮問機関とし、教授会の構成を制限して助教授、講師、助手などをのぞき（研究の中核となるこれら若手教職員の大学管理運営に対して、批判的見解を逃がれるためとしか思えない）しかも、大きな権限をあたえられる学長、学部長の選任にあたって文部大臣は拒否権をもつという内容をもっていた。これを機に自民党政府は、大学の自治の破壊をもくろみ、大学管理制度改悪の法案化（一般的呼び名は大管法）を試みたが、大学側と民主勢力が大学の自治、学問の自由擁護の旗をかかげ、統一と団結とによってあきらめざるをえなかった。しかし、その後、実質的に「大管法」のなしくずしを行っていることは羽田闘争、佐世保闘争、米軍野戦病院闘争、三里塚空港闘争、その他学園闘争、特に最近の医学部闘争等に明らかに表面化している。

しかし大学当局は、大学の自治を守るためには、権力機構と断絶しなければならないことは自明の理でありながら、ずるずると「大管法」流産後、その申し訳かのごとく、前出の「国大協」の「意見」を公表したのである。ここで大学内部の教職員の権威主義・官僚主義的な大学管理運営が露呈されているのである。

ここで大学管理運営・機構の現状をとらえてみよう。

大学のマンモス化は、学生数の増加だけでは、計量しきれない。それは大学産業の膨張に伴う現象である。そうして大学機構の複雑化と支配体制の変動は必然的に、官僚化となって現われる。ここで一方では、大学行政の専門化が説かれているが、実質的には、行政財政面と研究・教育面の双方にわたって、内在的官僚化はすでに進行しているのである。そして、大学機構の中で、政府の行政的機能の潜在的侵透は著しい。そして、大学内事務機構の権限が、学長ー教授会の権力から離れて、事務局長によって掌握されることは、ほぼ完成しているのである。さらに種々の学内問題が行政問題として処理されることは多くなり、教授会は形式化するのである。

これには、大学のマンモス化にともなう機構の複雑化と、教授会そのもの膨脹にも原因している。通常、このために委員会方式がとられるがそれは一方で、委員会を支配する「行政官教授」を生み、教授会は事後承認機関の性格を強める。こうして、「大学の自治」の中核といわれる教授会にも、行政化の波はおしよせる。これは単に、大学機構そのものが、膨脹の中で行政化し、日本の行政機構の常識に同化しただけとは言えず、完全なる政府権力への大学の屈服であると言わざるをえないのではないか。

ベトナム戦争問題において「ベトナムはベトナム人民の手に」と同じく「大学は大学構成者の手に」という基本的論理をかちとってこそ真の「大学の自治」は確立し始めるのである。

私学においては、私企業としての経営により、理事会の権限が「大学の自治」を常握している。そして、理事者の自己利潤追求のため、産業界と手を握り、「産学協同路線」は大学内部に浸透しより強化されるのである。又政府への追従として、つまり、国との経済的協力体制を確立するために、「軍学協同路線」も何ものとも思わないのである。

ここで、大学の自治確立の担い手である教授会は単に理事会との労使関係にとどまり、その壁をやぶろうとしない。現在の資本主義体制は大学内にも浸透しているのである。大学は、その理念からいって、社会の体制がいかなる形体をとろうとも、その体制から独立して存在すべきものである。なぜなら、これは、むしろ体制内に埋没する大学の閉鎖アカデミズムを真の開放アカデミズムに導くからである。

大学共同体における学生の自治

中央教育審議会答申「大学教育の改善について」は、大学の目的・性格、大学管理制度から大学入試にいたるまで、大学全般にわたって政府の具体的な考え方をのべたものであるが、そのなかの「学生の厚生補導について」では、大学自治と学生の自治活動との関係について、「学生の自治活動は…大学教育の目的達成に必要な範囲で規制されねばならない」「学生の自治は大学の自治の一環とみるべきではない」とのべられている。すなわち、学生は行政法上いうところの営造物の利用者にすぎないのであり、大学という行政機関の管理の客体として、もっぱらその営造権力による行政移序を厳守すべき者としてのみ性格づけられている。又前出の国大協「意見」の三営学規制の厳守にもみられる。これは、国大協が対立物（権力機構）を抽象化することによって、依拠するものをアカデミズムにおく。そのために、アカデミズム秩序の至上権化がおこなわれる。そして、その至上権の純化のために、すべてが切られる。そして、学生は教育主体でなく被教育客体であるから、学生自治は教育上の配慮であって大学自治と関係しない。その他、**四**学生処分の徹底化　**五**警官導入も辞さない等は、学内秩序維持の名目で学生のもつ表現・集会の自由を制限する方向に機能している事実を見落とすわけにはいかないのである。今や国大協は政府自民党の手先きとなりさがっているのである。

学生の自治は、学内・学外の両面から侵略され危機に瀕している。

このように、大学の自治と学内の自治活動を別個のものと切り離す考え方は、教職員と学内のあいだに断絶を生み、さらには大学と民主勢力を切り離す結果を生むことになる。このことは歴史的事実（例えば一九五二年の東大ポポロ事件）も物語っている。

なぜなら、大学共同体における教授＝学生の相互関係を成立しないことには大学の自治は確立しないのである。

学生自治会内部の問題・組織のあり方や運営方針や戦術がたとえ非民主的手段が弄され、多数の学生の意志が踏みつけられても、それは、世の識者のように「社会問題」すべきではなく、学生の自治に委ねられるべきである。そして教授は単に学問の教授や逮捕された学生のもらい下げや、権力からの告発に弁護し、身心傷ついた学生を癒ずためのアフター・ケアの仕事をするのみにとどまらず、主体的に国家権力から大学の自治全体を守りからとっていく立場に徹すべきである。そして学生の自治が教授会の自活とは別個の集団である以上その利害が対立する場合もあるがそれは、毛沢東の言葉をかりれば「敵対的矛盾」ではないのである。

しかし現在の状況下において前に述べたように、国立大では教授会が実質的に建設的な形で機能を発揮しておらず、私大では自治が経営からあまりにも多くの規制を受けすぎている。このように国立大、私大を問わず教授会の自治は幻想化しているのである。ここで学生の自治活動を確立させることが一層明確となってくるのである

学生自治活動の

政治性の意義

国大協「意見」は「学園の政治的中立」を言っているが、これは「学生の政治的中立」を内包している。そして、大学・学生を社会から孤立させ、大学の閉鎖主義を維持し、その中で「学問の自由」＝「大学の自治」を守ろうとし、学生の社会人としての権利を崩壊しているにすぎない。真の「学問の自由」の概念からいってそれは誤診である。なぜなら、社会的現実は常に大学にそして学生に働きかけているし、又大学・学生は社会的現実に働きかけなければならなく、社会＝大学・学生は平衡関係を常にとらなければならないからである。その中においては、すべての物の存在・思想が人間の主観の中で処理されてゆき、あらゆる事象に客観ということはあり得ないのである。たとえ客観的見解があったとしても、もはやそれは主観の中の客観でしかありえないのである。そこにおいて中立という言葉のまやかしはありえるはずがない。よって真の「学問の自由」は成立しないのである。

又、国大協「意見」は大学内の政治闘争の禁止を強調しているがこれは学生を政治的観点から盲目的にしようとし、つまり政治に対する批判、団体参加等を禁止し、政治的無関心者の育成をもくろみ現体制への従属を目的化しているのである。

学生の自治は単に学内における大学行政参加の権利を確立することではなく、同時に社会的権利や要求を確立し、守り、発展させることを目的としなければならないなぜなら、現代の独占資本主義体制では、学生はかっての特権階級を意味しなくなり、大部分の学生は労働者としてその道しか開かれていない。そこにおいては学生の学問を通じての社会変革・学問研究もことごとく阻害され、学生は単なる機械に使われる技術者としての技術を身につける目的にのみ学内から追い出される。すなわち学生の商品化であり、自己疎外化である。こういう状況の下で労働者の首切り、学生の就職難、生活状況の苦しさを見るなら、学生の未来も、労働者階級の社会的利害関係と密接に結びついている。そして、当面の問題として、羽田事件に参加し、起訴された学生に対して日本育英会の奨学金支給停止措置問題が起きている。これはいうまでもなく学生の生活権に対する不当な侵害行為であり、これは文部当局が大学側の手ぬるさに業をにやし、育英会にハッパをかけて参加学生を「兵糧ぜめ」にしたのである。このような状況下において、我々学生は現実の社会に対して常に批判的観察を加える必要があり、このような学生の社会的問題は、必然的に学生の自治活動の一環として内包してくるからである。そして人間の本質の獲得と自己開放は、自己と社会とのきびしい闘争の過程であり、社会機構そのものに対する闘争によってしか究極的には解決され得ないからである。

学生の自治は単に人間としての学生の主体に具わっている属性ではなく、このような社会的条件のうちに胚胎しているという認識から出発しなければならない。

70年に対処すべき課題

個人の選択性の重要性

確かに学生運動の動向は一九六七年後半にはじまる十・八羽田闘争以来、十一・一二の佐藤訪米阻止闘争、その後の佐世保、成田、王子と続く闘争推移の中で、運動に参加する学生のみならず、他の学生層に対しても、学生運動を媒介項にしてみる社会への思考を、いちぢるしく変遷させるべく、学生の意識情況を形成させた。又、同時に、個々の意識情況を日々の日常性の中に内在させ、情況の中での日常性への緊張感と、緊張感に対する不安と戦慄を抱かせている。現今の学生運動の基低には、常に六〇年安保を内在させ、そのサクラメントをふんまえて、その運動もエスカレートされてきている。そのエスカレートは、日々の生活実態として、学生の政治意識の睡覚と、より主体的因子としての自覚を植えつけている。すなわち、運動形態、行動の時点での思想選択と運動選択への自覚を主軸とする日常感覚からの行動は、現在の体制権力を牛耳る既成政党による、政治支配での、日本の動向とそれに対する欺瞞と不安を凝視し、何に対して反対すべきかを常時模索し続けているのである。

運動の中に息吹く理念は、常にいかに運動のイニシアティブを取るかを考察し、その理論＝行動という原理を内在させている。六〇年の安保闘争以後の四分五裂にもかかわらず、行動の原点は既成の政治思想から組織的、精神的にも自立し、離脱することによってもなおかつ、運動それ自体を形成しうる知的潮流をいかに組み上げていくかにかかっており、また形成しうるものとして、離脱と孤立の中に学生運動の主流をみつめてきた様に思われる。六〇年安保をいかにみるかは、われわれの年代層にとっては、個々の領域の問題であるが、一つの運動形態としての志向は闘争以前より六〇年安保の敗北は自明であり、またそれ事態が問題にはなり得ない。われわれが認識すべきことは、六〇年安保の時点で学生が反対運動を組織したという事実をいかに思想領域で受けとめ消化しそれからの離脱である。六〇年安保以来の学生運動の展開潮流の中で六七年の羽田闘争をみる場合、六〇年のそれとは完全に異種的要素をもってきている。それは羽田での「山崎の死」への受け取り方をみても明白である。

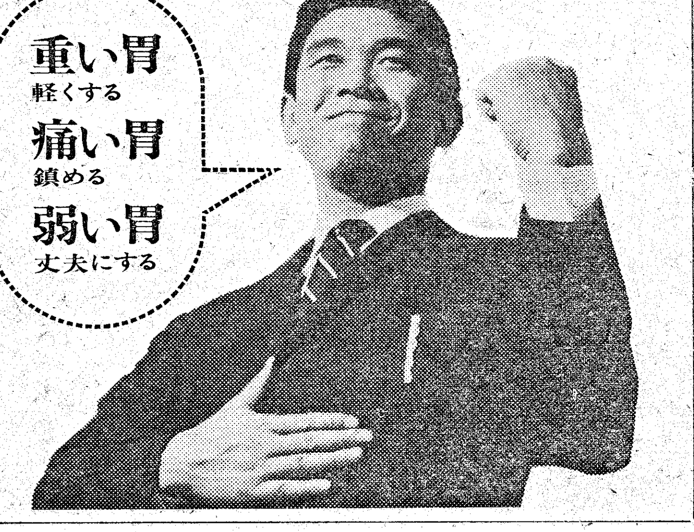
「死」そのものに対しては一つの事故的処理で向い「山崎の死の思想を生きねばならぬ」という価値感の相違である。個々の感情よりも、より明確な思想への推進と確信である。そして思想をいかに次期七〇年安保に焦点を合わせるかが問題となってくるのである。六〇年以来、六七年後半の継続的学生闘争の知的行動の前後には、常に七〇年という黒霧があることは明らかである。われわれは安保それ自体が日本の社会情況をどの様に変革させ、その情況の中でわれわれがどの様なメカニズムの中で処理されていくかを、六〇年安保から数年の時流の中でみきわめなければならない。国家とは、個人とは、又その因果は何かを。常に自己領域に次元を下降させ、その環流をうずめるべく思考と動行を形成させていかなければならない。又、今しかその時期がないのである。今の運動にみる潮流は、六〇年安保が、過去数年来の日本のベトナム戦争という肩棒をもつという形で決定づけられていると同様、七〇年安保自体も又、七〇年から八〇年までの十年間の社会情況を少なくとも決定づけ作用してくるということは自明であり、逆に六〇年以後の日本の時間流と全く別の情況を造り出してくるという保障も全くないのである。

日本の国家的選択が、社会状況を常に決定づけていくという社会メカニズムを、自己の内部に重積し、個々の運命決定をも、国家的選択により決定づけられてしまうという欺満を相互因子の分析により、強く歴史の中の時間帯を把握せねばならない。この時点に於いて七〇年安保は、いまや、歴史的時間が流れていることを、われわれに意識させると共に、たとえわれわれが自らの意識、個性を少しでも表出させない様につとめても、又、全く思想や理念が欠如しているとしても、社会メカニズムそれ自体が巨大な社会の中の一大衆として、われわれを常に処理し、社会情況の中で運命ずけられていくという認識をもたなくてはならぬ。安保がわれわれに抱かせるものは、少なくとも安保そのものが社会順応という合法的なものにすりかえることによる運命決定を余儀なくさせるということである。全てのものが現社会のメカの順応であり順応そのものが合法という幻想の産物であるという思考停止と時間帯停止をわれわれに常に付帯させてしまうという情況欺満である。

われわれは情況離脱への試索である七〇年安保をまずいかに対処しその中でいかに自己を行動選択により決定させてゆくかが問題である。常に缶づめの状態からの飛行を不可能にしむけてくるものは何か。すなわち、社会現象の中の屈折がどこで屈折され埋られてしまうかを動くという中で現状の中で分析しなくてはならない。われわれの七〇年安保へのリサーチは、現状への欺瞞と、時間帯の中での情況付帯というセンスを破りうる基盤に立却し、さらにその現状矛盾に対してより有効な闘いを組織しうる集団とは何かを常時検討しなければならぬ。現存の既成革新陣営とは何かという以前に既成革新陣営は深い危惧への意識状態しかもたせない。われわれの行動原理はこのような認識が上に立たねばならない。そしてこの行為に自らを企投しえない限り、自己への回帰はない。自己の領域で安保をとらえる場合、このような意味合いにおいて、はじめて決定的時点として、われわれには把握することができるのではないだろうか。しかし、行動を組織しうる段階においての課題は常に体制の中でしか反体制を唱えることのできない焦操感の克服は何か。現メカニズムの中でいかに克服していくかは、日常の中にみる現象屈折への現状分析への試向であり、模索である。それはとりもなおさず日常体験の中での屈折点設定と、体験そのものがどこで知解にかかわるのか、その構造を明らかにしていかなければならないということである。その意味で七〇年安保を、いかに日本独占資本との階級闘争の段階にまで普遍的に高揚させるかが問題である。又、この時点ではじめて安保そのものの存在が問題意識化されるのではなかろうか。日常生活の中で〃生〃を〃生〃たる所以とするものは何かをみれば、いかに〃死〃を意識化していくかが問題といると同義である。常に体制の中でしか成立しえない反体制への反発は、時として、感じられる自己目的のための官憲との激突のくりかえしは、その様な行動にしがみることのできない日々の検証なのである。またその中でしか検証できないという理念でもある。現在の学生の組織化は別として、今や、一つの実体化された真理や組織的的権威への順応にかかわって、組織よりも個人が優越するという機能集団による自由集散、離合形態が、より運動の有効性を示すのではないか。六〇年後半に於ける学生運動の低流には、個人思想による機能的集団化へと進み、個人的思想が一種の組織をもくずしていくという過程に進んできている様に思われる。

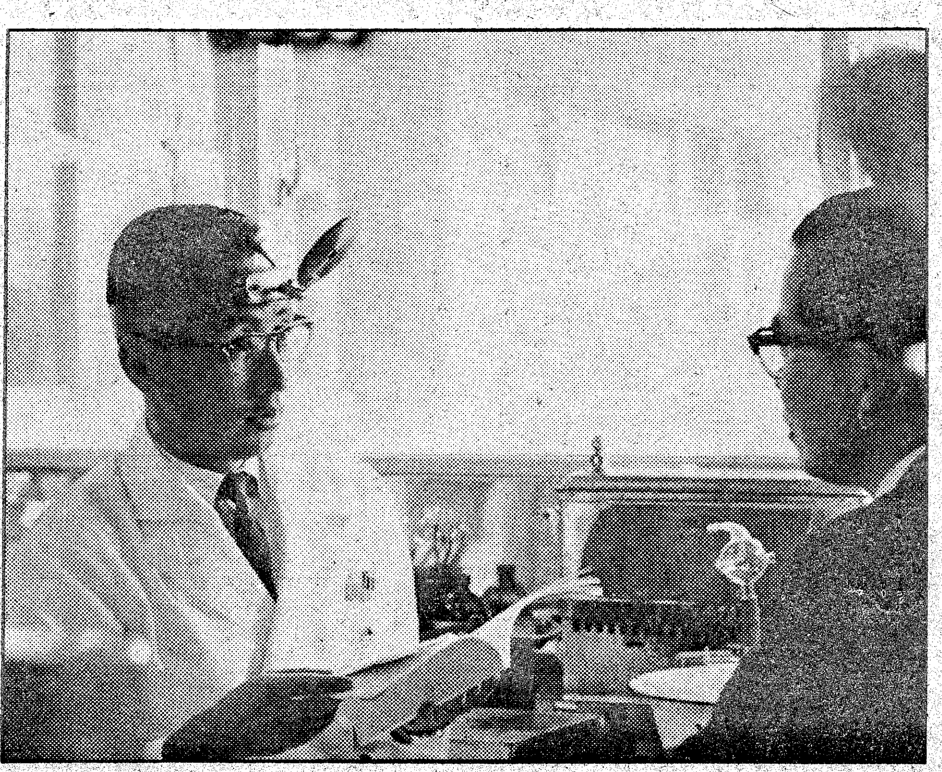
個々の領域内での広儀的な行動を組み立ててゆく中には常に、個人サイクルと、集団という組織との断絶の中でしか組織をみることのできない緊張感は、常に集団と個人という自由選択によってこそはじめてその運動形態の真理性があるのではないか。常に孤立の独自の立却点に基き自らを回復しつつ、社会に復帰しうるべき行動サイクルを形成し、いかに普遍的にまた自己をも普遍的に還元していくかが、われわれの七〇年に対処すべき課題である。

消化力の強い――タカヂアスターゼN配合
新三共胃腸薬
脂肪・蛋白質消化力の強いタカヂアスターゼNを中心に、制酸剤ノイトニン8種和漢薬の新配合が特長。重い胃痛い胃・弱い胃に優れた効果をあらわします。
錠剤・散剤・携帯用散剤
SPS
SANKYO
純良医薬



京美D・ストアー
営業品　時計・電化製品・テープレコーダー
トランジスタラジオ
美術部　書画・骨董
石原政治
杉並区阿佐谷北二ー三七ー十三　TEL(338)五七一八

常に信頼される医薬品をつくる…
山之内
山之内製薬
製薬会社のプロパー＜拡張員＞は会社の顔です
病院へ、医院へ、薬局へ…　行動的な彼らの活躍が顧客の信頼をつかむとき、会社も成長します。
しかし、そのためには製品に対して深い理解をもち、顧客に対して十分な説明のできるスペシャリストが必要です。
信頼されるプロパーへの道、それはまた諸君にも、その専門知識を活用し、さらに伸ばす機会を存分に与えます。なかでも医家向け新薬を営業の主体とする山之内製薬は、諸君のスペシャリティを最大限に発揮させるあらゆる機会を提供します。
営業の第一線で、その知識を積極的に生かそうという行動的諸君の入社を歓迎します。



■会社概要
資本金/36億円
従業員/約2,900名
売上高/約192億円(昭和42年度)
営業品目/タチオン・ピロミジン・カロマイド・コメタミン・バランス・ホリゾン・パラキシン・アナナーゼ・アルファケリー・ファイナ・3・ヒヤクなどの医薬品のほか工業薬品、農業などの製造・販売並びに輸出入
採用関係連絡先
採用についてのお問い合わせは、いつでもご遠慮なく、下記までご連絡下さい。(募集要項は大学宛送付してあります)
山之内製薬株式会社組織人事部人事課/東京都中央区日本橋本町2丁目5番地　電話 東京(03)270-5111(大代表)

学生論壇

状況へのアプローチ

"高経大闘争"を媒介として

不正入学阻止に端を発した高崎経大闘争は、今や十数名の全く孤立した学生達により、法廷闘争に入っている。二ヵ年間にわたり学校当局は五次にわたって処分者七十四名を出し、市当局、警察当局、大学側と三者一体となって権力側は、露骨な弾圧を高経の学生にしいている。今日追い込まれた状況の縮図をここにみるのである。

群馬県の高崎市にある、公立高崎経済大学は、地方都市が資本主義的発展を遂げるに必要な産業人を育成する為に創設された。

毎年定員の六、七倍の合格者を発表し、高崎市在住の受験生を優先に入学させている。これは「今年の不正入学者は、三百名におさえたい」（徳田学長　四十年四月発言）からも明らかである。これに対して、自治会は不正入学阻止の闘いを展開し、学長に、①受験生の住所、氏名、番号の明示、②採点への学生のオブザーバーの参加、③判定会議への学生の参加、の三点を要求したが、「大学の管理に学生は参加できない」と拒否され、警察と連絡した教授会は、突如、自治会員に無期停学五名、三ヵ月停学九名の処分者を発表した。

入試当日は、試験場にあてられた上智大学に武装した官憲を配置し、ビラで抗議した学生もすぐに退学処分された。こうした大学側の暴挙にひるむことなく、「処分白紙撤回」をスローガンに無期限のストライキに学生達は入っていったが、大学側は、市の職員、私服百五十名を動員して、学生達のピケ隊のゴボウ抜きにかかり、拠点である学生ホールに攻撃をかけていった。

連日にわたる市内デモに千五百名の学友の参加をみたが、短期間内に、爆発的エネルギーを燃やした闘争は、結局市側の条件を学校側が承諾し、学生側もそれを認めて終焉する。そしてその後にみたものは、市の財政の窮迫を理由とする市長の大学私学化案であった市役所でのすわりこみ等で一応、公立維持は保たれたものの、大学側は、学生への切りくずしにかかっていく。昨年の一月二十二日、再び不正入学阻止闘争に突入した学生が築きあげたバリケードを暴力で破壊できる程の、スト反対派の学生数は増加し、右翼学生を中心とした体育会を大学側は自治会に押したてようともくろんでくる。処分を受けた自治会委員は、闘争委員の中核となって、最後の「とりで」である学生ホールに閉じこもり、全員バイトでかせいだ金、活動家からのカンパ等で一日の食費一人あたり一五〇円で闘っていく。処分者の父兄には大学側からすぐ通知が行き、処分を受けたある学生は両親に連れもどされ、またある学生は自ら高崎経大を去っていく。しかし闘争委の一人は、「僕と家族とは赤の他人だ。もし正月に熊本の家へ帰ったとしたら家族が家に入れてくれるかどうかさえわからない。高崎以外の場所でできることをやっていくような問題のたてかたはできない。

なぜなら高崎でできない者が他の所でできるはずはないし、高崎よりは少しは条件のいい所で何かやろうなどという発想自体がすでに誤っている」という。これらの闘争委は、学生ホールに寝とまりして闘っていく。一般学生と闘争委との亀裂、さらに闘争委の中からも次々と脱落者をだしていく。闘争委が高経の教室でアジ演説をやり、ビラをまこうとすれば、大学側の職員から暴力ではじきだされ、彼等がそこにみるのは市の権力と癒着した教授連である。

そして学生ホールから一歩外へ踏み出せば、すでに顔なじみになった刑事が待ち伏せ、闘争委の故郷の家、両親はもちろん、友人、恋人までどす黒い権力の弾圧がのびていく。不当に逮捕された闘争委の公判が昨年十一月二十七日に前橋地裁で行なわれたが、これを傍聴したり、集会に参加しようと一般学生がすれば、白マスクで顔をかくさねばならなかった。これは、「告示、被処分学生で学生ホールを不当に占拠しているものは退去すべし。本学学生にして、九月四日の新美、角田らの公判に関し、許可なく学内で集団行動をとるもの、その他外部において違法デモ、交通違反、公務執行妨害等国法を犯す行為のあったもの学生の本分に反する行為をとったものに対しては厳罰に処する。

昭和四十二年八月二十八日、高崎経大学長、徳田進」というキバむきだしの弾圧により、大学側にたとえ批判的であっても、闘争に参加することは即ち退学処分を受けると同じ状況に高経の学生は追いこまれている。大学側が学生の自治活動の規定を一方的に追しつけ、高経内の自治を骨抜きにしている。その内容は、会員名簿の提出、団体更新届、等の規定にあり、これらの弾圧に対して高経の新聞会が闘いを展開すれば、非合法団体と会をみなし、顧問制を強要し、完全なる形での新聞の検閲制度をしいてくる。

さらに自治会費を自治会に渡さないで、自治会を大学側の息のかかった学生で構成させ、代議員の選挙の際も、学校側の不当な干渉を招き、形骸化した高経の自治活動をみるのである。不正入学阻止私学化反対闘争の次元では、非常に道義的なもので一般学生を動員できたが、二年間にわたり、市の権力ビッタリの大学側の熾烈な弾圧の前に次々に闘争委も脱落していく。

公判裁判で学生ホールに閉じこもった闘争委の起訴状の内容は「被告は学生達と共謀し、……市役所職員目掛けて突進し、これに体当りをし、あるいは押すなどして……〇〇の左足を蹴り……全治五日の擦過傷を負わせ、……罪名公務執行妨害、傷害」（東工大新聞六五七号より抜粋）というものである。その不当性及びデマを弾劾した後闘争委は、「市権力によって抹殺されてゆく学生自治を守るために、市職員を阻止した行為が公務執行妨害とされ、我々はここに立たされている。この裁判こそ大学を改編し、自治の圧殺を図る支配階級により仕組まれた"茶番劇"である。我々の正当な行為を一つの刑事裁判の中に押し込め、問題の本質をそこで窒息させることは絶対に許せない」（東工大新聞六五七号より抜粋）と陳述した。"退職者同盟"ともいえる処分を受けた闘争委、学生ホールにとじこもり、バイトをやりながら生活していく状態それは生活そのものが思想に近づくといういわば極限状態である。彼等の生活基盤まで侵害され大学から追われ、両親家族とも切り離され、警察からつきまとわれて、生の弾圧の中に生活していく。

闘争委が動けば処分と逮捕、あるいは起訴と、沈黙か妥協のいずれかの選択である。権力者の弾圧下で、闘争委の生活自体が思想に近づく極限状態は、人間性を保つか、否かまでせまってくる。それは自己の存在を権力にゆずり渡すか、それとも人間としての自らの存在をかけて闘っていくかにかかってくる。十数名の闘争委の中で、ある[illegible]へ遊びに行こうとする。するとある闘争委はその学生に「なんでお前はそんなことをするのか」とはげしく詰問していく。他人に問うことは、ひるがえって自分自身への問いかけでもある。彼等は、オルグ活動したり、他の組織に救援をたのむ余裕さえない。生の権力の弾圧の状態下では、つきつめられた自分自身がどうなるだろうか、それだけで精一杯である。高崎という一地方都市の大学にかけられた弾圧は、日本のすべての大学の未来を予見している。そこには権力側がそうとう先取りしている。現に東大では文化祭を開くときサークルの名簿を提出しないと大学側は予算を出さないと言ってくる。あるいは東京の大学では立て看板、ビラ等の許可が問題となっている。

今東京の大学で問題になっているそれらが、すでに高経には表われていた。高経大は権力の介入があまりにも苛烈であり、70年安保へむけての日本の支配者階級の大学へのイデオロギー的改編、産学協同路線、そして学生運動への弾圧と、今日の大学が置かれている状況が、集中的に表われている。60年代後半から70年を目前にして鏡の中に鏡をのぞいてみる様ないわばモザイク的現象の中で、高経闘争にせまっていくことは、状況への一つのアプローチである。

われわれの想像力以上に現実が進んでいく状況下では、ある一点部分に固執し、そのリアリティを通じてしか時代の全体像に通じ得ないのではないか。高経闘争に集中的に迫ることによってかろうじて状況を洞察する視点への狭き門を突破できる。学生ホールに寝とまりしてバイトをしながら闘っていく十数名の学生が何故苦しみ何に実して自分達のすべてをかけて闘っていくのか。そして彼等の人間快復のエネルギーを狭い法廷にとじこめ、何が彼等を裁こうとしているのか。人間的であろうと主体的に立ちあがっていけば強大な権力の下では、それだけ人間疎外に落ちていく。

現在では闘争は決定的にやれば敗北にきまっているし、現時点での権力への闘いは追いこまれてしまった次点で闘っている。それは三派、革マル等の反日共系全学連の行動をみても明らかである。極限状態で権力と闘い、獄中では二人の学生は完全黙秘で闘っている。高経闘争を事実としてとらえていき、その中の闘争委の存在を徹底的に見つめていき、個人の次元で権力と闘っている彼等に、単に感情移入するのは何の意味も持たない。われわれが彼等の闘いの場に自己を投入し、自己変革のプロセスで、闘争委に接近することができる。彼等闘争委が自分達に対する不当な疎外、干渉に対する怒りを、ぶつけていく過程で、権力の実体があばきだされていく。日常性の外被をはいだところに表われる、状況そのものの裸の姿を高経に発見しそれは権力の前に引き裂かれて立たされている現実のわれわれの姿でもある。

内部的恐怖の解明

「万延元年のフットボール」より

生を愛する故に死を恐れる思想は欺瞞であり、生の苦痛を征服し自殺する勇気を持った新しい人間こそ自ら神となる

=ドストエフスキー=

歴史的事実や記録から離れて、完全な作者自身のイマジネーションの世界を形成した作品の一貫して流れるテーマは、百年以前に四国の谷間で起きた一揆と"六〇年安保闘争"に意味付けを与え、抽象化された事件を重ならせることにより、作家的な見解を与える。

だが全編を通して流れる作品の骨子とはなってもテーマの本質にはなり得ず、複雑な挿話をまとめてゆく過程に出てくるものは、人間の持つ最も根源的な位置から出発する時に見出せる"あるもの"、蜜三郎の友人が奇怪な扮装のまま自殺していったその死を生み出したあるものについて鷹四がその友人に語ったという言葉「本当の事をいおうか」に要約されてくる。

死は不意に相互の絆を断ち、生き残った者に伝達不能になる少なくとも奇怪な死をとげた友人にとって「本当の事をいおうか」というあるものへの存在感にだけ接する事ができ、その為に死を選んだのかも知れない。死体は物質であり、物質自体は何物をも語り得ないが、言葉の推測によるイマジネーション化した死体は、初めてわれわれに伝達不能のあるものを植えつける。

これは生者としての蜜三郎を夜明け前の暗闇に、熱い「期待」の感覚を求めて暗い穴ぼこの地面にじかに腰を下して膝を抱えたままの姿でじっとうずくまるような行為に駆りたてる。

素面でいられない、暗闇の穴ぼこの底にじっとうずくまらなくてはならない状態、これらはいずれも死者の関わる地獄、それは漠然とした不可解な怯え、人間の根底にどす黒く渦まいている本当に怖ろしいもの、奇怪な世界への不安のあらわれである。

朱色の塗料で頭と顔を塗りつぶし素裸で肛門に胡瓜を差し込んで縊死していった蜜三郎の友人の異様な死に触発され、蜜三郎も又、拒否し難い巨大な人間内部の地獄、自身の内部にも潜んでいる暗黒を隙き見ずにはいられない。

一揆と安保闘争の二つの社会的な事件を通じて実は、人間を支配し、従属させていた絶対的なもの、信じて疑わなかった価値あるものが音を立てて崩れ去り、現代の状況の中でこれらの怯えは本質的に生命の根底にある内面的な世界まで及んでゆく。

最高の価値がその価値を剥奪され、人間の存在そのものすら無価値に転落した。人間を支えてきた全ゆるもの"何の為に""何を為すべきか"は拒否され、生の側面にある死の世界を垣間見る事によって、無価値からの脱出をはかろうとする。

死に能動的に関わってゆくモラルとしての死を窮極的に乗り越えられる、死に向かって、真っしぐらに突進してゆく、不確実な刹那的な存在としての生を拒否する事によって自殺者のモラルは成立つ。

地獄を前にして、自分の内部と切迫した関係を保ちながら、しかも己れ自身の存在は解説し難い状態であるにもかかわらず、自分自身の中の地獄の深淵に怯えて「本当の事をいおうか」という言葉を解明してゆこうとする方法を模索し曖昧な感覚から具体的に新しい組成式を見出してゆく過程に、自身の存在が確かめられてゆく。秩序その姿勢の中には、現実の世界秩序を絶ち切り、破壊の意志、虚構の日常性を拒否してゆく意志がある。自殺者は、その外側を死の事実に埋められ、内部からは、「本当の事をいおうか」の中に閉じこもったまま、死によって、死を拒否してゆく。

日常性の危機

何の変哲もない倦怠の日常性の中に常に予測し難い異常な事、危機が内在している問題として顕れて来るのは、日常性の時間帯に、生活そのものの秩序を支えているあるものの中に突発的に起る予測し難い状態で厳然として存在しているからである。

文学の分野での新しい開拓でその深化と内部から推し進められる幅の広がりは、日常性の中に侵入して来る内的な混乱と不安に満ちた要素からの苦悩とその過程の中かの脱出が、文学作品の中で激しく葛藤し、生きづいてくるからで、予測し難い出来事へ臨む日常的なあり方が、死をもって「本当の事」へ飛躍しようとした友人や、暗い穴ぼこへ埋くまって、眼を閉じた蜜の肉体が腐敗の時間帯を過す体験する行為や、蜜三郎の奇怪な行為を目撃して怯える妻の形で示される。

死へ臨む日常的なあり方が密三郎と妻の強い印象を与える実現的な怯えは彼等の赤ん坊が、渇いているのか飢えているのか、又他の種類の不安を覚えているか、一切解らない、薄暗がりに水培栽の植物のように無表情な眼をじっと開いて横たわり、ただ静かに存在しているだけだ。彼は何一つ要求しないし絶対に感情を表現することがない奇形の幼児として、象徴的に近親者や、世間一般に絶えず起り得る出来事として日常性の中に特色もなく存在していることを設定する。人間の生は無限でない、だが当分自分の死ぬ番ではない。死に臨む日常的な存在が明らかにされてゆくと生と背中合わせの形で常に死が色濃く浮彫りにされる。取り立てて自分とは関連性がない出来事として慣わされてしまう日常的な出来事が単に人の"死"に止まらず、常に生そのものをおびやかしている。暗黒の深淵、地獄に常に身を傾きかけている危機的要素が、いつでも日常性の中にぬき差しならない個人的な恐怖として体験されていく。

作品中に幾度もデザインを変えて登場する蜜三郎の個人的な問題としての罪悪感、恐怖に対する敏感な怯えは、この地上にある社会、一つの共同体から剥離している状態で確実に社会復帰を行為しようとする時、その前に横たわる地獄の深淵にとまどい、跳び越える事の出来ないままに虚構に埋没されてゆく、結局は実像の社会に対する本質的な怯えである。

社会が個人を同化し排除するものとして獲得しない限り、個人は共同体の中に生まれ得ない。日常性の共同体は個人の内部で一つの大きな断絶につき当る。

「俺は引き裂かれていると感じていたんだよ……俺を引き裂く、暴力的な人間としての自分を正当化したいという欲望と、そのような自分を処罰したいという欲求に引き裂かれて生きてきたんだよ。そのような自分が存在する以上、そのような自分のままで生き続けたいという希望を持つのは当然だろう？　しかし同時にその希望が強くなればなるほど、逆に、そのようなおぞましい自分を抹消したいと願う欲求も強まって、俺はなおさら引き裂かれた……。

俺は自己処罰の欲求を感じると一緒に、目もくらむほど恐ろしかった。おれはつねづね死を恐れている。しかもそういう暴力的な死がもっとも恐しいんだ。それはS次兄さんが撲り殺された日以来の、克服しようのないおれの属性なんだよ……。」

一つの物質が我々に関わってきた時、その物質が我々に与える内部的なある一つの非人間的なものが我々に与えていた一切の価値判断を拒否し、幾世代にも渡って我々が理解し受け入れてきた存在が突然、予め我々の世界において物質に付け加えたに過ない形態や構図であり、この瞬間から、物質と我々には確実に断絶し近ずく事のない距離に存在する。

非人間的なものは、虚構にあり我々の内部に立入る事のできない厳然とした存在の断続が、人間にとっての恐怖であり、不安と結びついてくる。

共同体からの離脱は、一つには非人間的なものとの断続であり、その間には暗い森が黙い深淵を見せている。自殺を行為する事は実に虚構を跳び越える事によって、地獄を敢然として受け入れる行為によって、実像の共同体に復帰してゆく正当な手段として行使される。

"眠れ、眠れ、それが出来なければ眠った人間を模倣せよ"視力を失なった右眼は、右前方に待伏せする多くものに出合い、厭らしく無意味な出来事に突然に衝突する繰返し頭、顔を強打し、そして右半分は生ま傷の絶え間がなく醜い日常性に秘む時間帯の中にわれわれは一様に身をゆだねる。眠った人間を模倣したところで、時間は容赦なくわれわれを運んでゆく。一瞬一瞬は絶え間なく通り過ぎてゆくが眠りは人間の荒廃した側面の苦い毒を耳と眼・鼻・口・肛門・尿道からチューブ入りのゼリーのようにゆるゆるはみ出そうとしている。明日・将来しかるべき時代がかって来たら己れの生きるべき時が来たら……このようにしてある日がやって来て己れが荒廃の時代から共同体の中に入れる時期になった事を望む。だが死ぬ時が来る事を認めようとはしない、自分の若さを時間と己れの関係に身を置くと、自分の辿ってゆく時間帯のある瞬間の点に立っている事は認めるとしても、彼は時間に従属していて時間こそが己れ自身の内部の恐怖の主流をなす原因ではないかと気がつき、時間帯に敵意を抱く。

真夜中に倉屋敷の前庭で谷間の空間に降りしきる雪が時間をそのまますうっと維持されて他に雪の動きはありえないような固観念定にとらわれる。一秒間の実質が無限に引きのばされ、雪の層に音が吸収されつくしてるように、時の方向性も、降りしきる雪に吸い込まれて失われる。遍在する「時」素裸の鷹四が輪をえがいて前庭を駆け回る。あっあっ、と強い力のこもった声を発して雪の上を横転する。

鷹四の滑稽にして悲壮は現代の英雄的行為が、背後に大きな病根とも言うべき性的な喪失感、陰湿でいやらしい無力な「恥」から脱出しようとする積極的な願望が秘められている。破壊力を獲得できない「恥」、危険を冒す必然性がふんだんにある行為を少なくとも積極的に推し進める事によって、現代の致命的に精神、および肉体が勃起不能におかされている状態からの脱却が常に破局と並行して進む。

鷹の内部に持つ巨大な深淵の、その存在感をかつて覗き込んだ事のない深みにまで確かめてゆく。谷間の暴動が破局におちいり、自らの孤立を招く結果を自覚すると「オレハ平当ノ事オイッタ」と書き残して鷹四は自殺する。あくまで己れの積極的に行為し内部の地獄を告白する事により、そこから実像のある生の領域に復活してゆく。あくまでも己れの原罪を背負って、それに雄々しく耐える者のみが地獄を獲得してゆく。最後のどん詰りで抜け穴を用意しておく卑劣な手段は、日常的な秩序性に妥協し虚構の社会に復帰してゆく。まさに端境期を通りぬけたと思う正当性は現実から妄想に移りたちまちにして虚偽に変わり妄想の真実は万延元年の一揆の指導者の中に鷹四が己れを定着させる事を望みそして死の妄想を行為してゆく。

「自分の内部の地獄に耐えている間への想像力を僕は持とうとしなかったのみならず、鷹四がそのような人間として新生への方途を探る努力にも終始批判的だった。」

暗い森の途上で泉を見つける感覚を持ちながら「本当の事」に気づいていても、それに飛び込む勇気を欠いた者はいわば時間帯に棲息して日常的なれあいの下に大人になりきれずに生きのびてゆき青春の荒廃をさまよう。

四年　伊藤　哲

屈辱的な白覆面をかぶり、前橋地裁の庭で抗議集会を開く学生達（朝日ジャーナルより転載）

グリル
いち松
日本橋室町2-8
松田はる(甲府市)
TEL(241)4528

日本薬学会編
繁用衛生試験法と解説
A5判四六四頁　挿図一六〇函入上製　定価二、三〇〇円
増刷2版
日本薬学会協定「衛生試験法」のうち、薬学教育にとって重要な試験法ならびに試験現場において、利用頻度の最も高い試験項目を選んで編集したもので、薬学教科書として最適な内容と手頃な形体を備えている。

著者	書名	版	体裁	価
高木敬次郎・小沢光 著	薬物学	10版	A5六四四頁	価二七〇〇円
東邦大学教授 清水藤太郎 著	薬剤学	12版	A5三二〇頁	価一三〇〇円
東京薬大教授 藤田路一 著	生薬学	5版	B5五一六頁	価二九〇〇円
薬学博士 中島栄一 著	新薬剤学入門	2版	A5二二六頁	価一三〇〇円
塚元久雄 他四氏執筆	衛生化学	3版	A5六一〇頁	価二五〇〇円
塚元久雄・奥井誠一 著	裁判化学	9版	A5三三〇頁	価一三〇〇円
東大名教授 弓館守三 著	微量定性分析	16版	A5四八六頁	価二一〇〇円
田中穣・倉田浩 著	薬学領域に発酵化学	5版	A5二一七頁	価一二〇〇円
東邦大学教授 清水藤太郎 著	薬学ラテン語	11版	A5一五二頁	価四〇〇円
田口胤三・山田俊一・大木貞雄 著	有機薬品製造化学	初版	A5五三三頁	価二五〇〇円
高木敬次郎・小沢光 著	薬物学実験	改4版	A5二三〇頁	価九〇〇円
藤丞鶴・村上悠紀雄・吉沢康雄 著	放射薬品学	初版	A5三七六頁	価二〇〇〇円

東京都文京区湯島四丁目一ノ十一
電(〇三)八一一—七一四一　振替東京六三三八
南山堂

社員募集
当社は大日本製薬株式会社と米国アボットラボラトリーズとの合弁会社で、昭和39年12月に設立されて以来、アボット製品の紹介並びに宣伝を行なっています。
採用職種　病院・開業医・薬局等への宣伝拡張業務並びにこれに付随する業務
給与　基本給　昭和44年度未定
基本給の他、外勤手当あり
昇給　毎年6月
賞与　年2回
福利・厚生　住宅手当支給、通勤費全額支給
退職金規定、健康保険制度、厚生寮（熱海・宝塚）あり
労働条件　勤務時間は1週42時間を原則とします
大阪・東京の場合、週5日制
午前8時30分～午後5時50分
（土曜休日）
休日　日曜日・国民の祝日・年末年始（12月31日～1月3日）
神農祭
望ましい人物　意志強固で当社と共に長く働く事を望む人、思想穏健、身体強健、研究心に富む人、昭和44年3月卒業予定の男子、出来れば英語に興味と関心を有する人
日本アボット株式会社
本社　大阪市東区平野町四丁目十八番地
東海ビル内
駐在所　東京都中央区八重洲一丁目一番地
八重洲田村ビル内
他　福岡・札幌・名古屋・広島・仙台
連絡先
日本アボット株式会社　本社　TEL（231）2633
日本アボット株式会社　東京駐在所　TEL（271）5201
大日本製薬株式会社　人事部　TEL（203）5321
大日本製薬株式会社　東京支店　総務部　TEL（270）2011

診療時間　午前9～12時
夜間（月・火・木・金）6・30～8・30
休診　毎土曜日及祭日
内科・循環器科・胃腸病科
小児科・皮膚科・放射線科
藤沢内科クリニック
院長　藤沢正輝
台東区上野桜木2—9—8
TEL（821）3577

白衣の御用は
まっ白にしあがる
白清舎
東薬大男子部通り
（三七一）八三三〇

○実験器具
○白衣
○文房具
大沢商会
東薬大男子部内

●営業時間
平日早朝6時～　日祭日早朝5時～
ブランズウイックA₂マシーン　34レーン
国電鶯谷駅前
上野スターレーン
東京都台東区根岸1－2
TEL（874）2277・6800～1

スナック喫茶
ゴージャスなムード
ビーバー
東薬大男子部前

○定食
○もりそば
○天丼
○カレーライス
○ラーメン
男子部
食堂